
遊戯王 LEGENDs ~ 伝説の名の元に ~

廃棄人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 LEGENDS ～伝説の名の元に～

【Nコード】

N1158Y

【作者名】

廃棄人形

【あらすじ】

俺、一ノ瀬燈夜は別段変わった生活をしてた訳じゃない。友達と高校行ったり、遊戯王やったり、デュエルモンスターズやったり、決闘したり……………。

今日も、久し振りのチャンピオンシップ……………通称CSに出掛けるところだった。

突如聞こえる声。

次々と倒れる皆。

そして、とうとう俺も……！

次の瞬間。

目を覚ました俺の前に居たのは、ブラマジとブラマジガールだった。

『遊戯王 僕らの進んで行く道』と並行して連載することになりました。

向こうは、コラボ相手である『紫苑の槍』様との相談の結果、一週間に一度の更新になりますが、こちらはそういうのも無く、不定期更新になります。

なるだけ早くしたいと思ってますよ、ハイ。

「別れの言葉は、要らないよな……」

事実は小説より奇なり。

真つ先にそんな言葉が思い浮かぶのは、俺が変だからだろうか。いや、俺自身、自分で小説を書いているからだろう。そう思いたい。そういえば……あの小説、今良いところだったんだよなあ。主人公が最後の戦いへと出向いていったのに、複数のヒロインはそれを知らずに仲間たちと平和な時間を過ごしている。

その時、主人公が行った言葉はただ、一言。

「別れの言葉は、要らないよな……」

『あの……私の話、聞いてる?』

「何も見えない聞こえない世界は平和です本当にありがとござい
ました」

ビバ、現実逃避

遊戯王チーム、LEGENDS・伝説という名を付けて、俺たちは活動していた。

活動っていつても、実際はそんなに大逸れたことをしたわけじゃない。各地の遊戯王チャンピオンシップ……通称CSに出向き、デ

ユエル動画を撮影、投稿し……ブログを作ったりして。
メンバーは俺含めて4人だけだ。それぞれ一癖も二癖もある性格だから、人気が分割されてた。

「あゝ……ねみい」

せのハジメ
瀬野基。耳にピアス、ドクロのシルバーネックレス。指には指輪……見た目だけならばかなり素行の悪そうな不良だが、実際は心優しい男だ。

俺が初めて会った時は、凄く荒れてたっけな……。

「……お前のことだ。昨日、夜遅くまでデッキの調整でもしていたのだろう？」

……クールだ。凄くクールだ。クールになれよっ！ とは言わないし言われもしないだろう。

たきがわユキヒト
瀧川幸仁。長い髪を後ろに縛っている、メンバー内一番の長身だ。少しで良いからその身長を分けて欲しい。

「今日は久し振りのCSだもんね。僕も楽しみで眠れなかったよ」

コイツは長谷部慧。はせヶケイ中世的な顔立ちで、女装させれば凄く似合うんじゃないだろうか。

何故か走らないけど、俺に凄く懐いている奴だ。一部ではゲイ疑惑も浮かび上がっている。勿論、お相手は俺……やれやれだ。

「んなことより、早く行こうぜ？」

そして俺、一ノ瀬燈夜。いちのせとうやメンバー内で一番特徴が無い、という嫌

味な理由でリーダーやってます、ハイ。

……そりゃ、自覚してるけどさっ。3人みたいに顔が良いって訳でも無いし……頭も良くない、運動神経もびみよ……良く鈍感って言われるし……あ、涙が。

「なんで泣いてるの、燈夜？」

「……自分が情けなくなっ……つか、ちけえよっ！」

「あぁっ」

なんでそんなに残念そうなんだ！？

そんなんだからマン研（マンガ研究会……という名の腐女子の集まり）にネタにされんだよっ！ 無駄に絵が上手いのがさらにムカつく！

……閑話休題。何言っただか、俺。

『 やっと、見付けました』

「……え？」

声。無駄にイケメンボイスの音が、脳内に響く感じで聞こえてきた。

……とうとう俺も厨二病か！？

「誰だっ！」

と思ったら、どうやら聞こえたのは俺だけじゃないらしい。

基が声を張り上げてるし、幸仁は怪訝そうに眉を潜めながら辺りを見渡しているし……。慧に至っては、何故か俺に抱きついてるし。

「皆にも聞こえた……のか？」

「ああ……男の声だった」

「はっ？ 俺ア女だったぞ？」

「僕は男の人だったけど……」

……基だけ女性の声？

それにしても……4人全員聞こえたって事は、ただの厨二病の症状じゃないってことだよな……一体何なんだ？

『私たちの為に、戦って欲しいのっ！』

「うわっ！？」

こ、今度は女性の声……！？ しかも、どこかで聞いたことのあるような……！？

頭が混乱して、訳が分からなくなってきた頃。

基が、ばたりと倒れた。

「基っ！？」

そして、幸仁が。

「幸仁……！」

最後に、崩れていくかのように俺の身体から落ちていく慧。

「け、慧……」

何が、どうなって。。

次の瞬間だった。

頭が少しずつぽーっとしていく感覚。身体力が無くなっていく感覚。

数分後。

その場には、誰も居なかった。

「別れの言葉は、要らないよな……」（後書き）

『遊戯王 僕らの進んで行く道』の方と合わせて、感想、評価などお待ちしております！！

「……………現実逃避して良い？」

「……………え？」

「……どこだ？」

朝なのか昼なのか分かり難い明るさの空。眼を細めて遠くを見つめると、山や海、ガラクタの詰まれた場所……………様々なところが見える。

……………俺、そんなに眼が良いわけじゃないから見間違いだらう。若しくは夢だ、間違いない。

そう思っただけ俺は頬を掴る。捻^{ねじ}るように引張った。

「……………ひたひ」

馬鹿な……………そうか、これは痛みのある夢なんだ！

『お目覚めですか』

「うひゃあっ!?!」

だ、誰だっ……………!?!

視線を後ろにやると、誰も居ない……………訳も無く。半透明で、且つ宙を浮いている黒い魔道服を着た男性。勿論、右手には杖。

……………。

「夢だ……………目の前に《ブラック・マジシャン》が居るなんて夢だ……………っ!」

通称BM。アニメでパンドラって奴が使ってたギャル風BMじゃなくて、普通の……普通のって言うのも変だけど……武藤遊戯が使ってたBMだ。

つまりは……マハードだ、うん。

『おはよう、マスター』

「……は？」

……え。まさか、そんな。

ブ……………！

「《ブラック・マジシャン・ガール》！？」

『マナって言いま〜す！』

にっこり。あ、可愛い。

じゃなくて！ え、つまりどういうこと！？ つか、その服、カードで見てた時もエロいなあ、なんて思ってたけど……実際見るともっとヤヴァイ……………！！

「やっぱ……夢だ……………」

しかし、夢でもBMGブラック・マジシャン・ガールに会えるなら別にこのままでも…………げぶん、げぶん。

『夢では有りません』

「いやいやっ！ これが夢じゃければ、何が夢なんだよ！？」

『ん〜、将来の夢？』

……間違っではないけどさ。

「……万が一……万が一、これが夢じゃないとしたらさ……なんで俺を呼んだんだ？」

『マスター……燈夜殿には、世界を救って頂きたいのです』

……何、そのテンプレ発言。

「世界を……救う？」

そりゃ、アニメではそんなようなこと起こってたけどさ。

「……訳わかんねー」

『私たちにも原因は分からないだよ。なんか突然、色んな世界が崩れ始めちゃって……既に2つ、滅んじやった世界もあるし』

は……滅んだ世界？ 世界ってやっぱ複数あったのか？ 小説を書いている身として、異世界の存在があれば良いなー、とは思ってたけど……。

けど、俺は素直に喜べない。滅んだ世界があるってことは、その世界に住んでいた人たちは死んじやったってことだ。

残念ながら、BMとBMGの表情は重い。とても嘘を吐いているようには見えなかった。

「マジ……なんだよな？」

『ええ。そして決まって、滅ぶ世界はデュエルモンスターズ……地球で言う遊戯王が盛んな世界なのです』

もしこれが夢じゃないとして、と考える。

今、俺が居るこの場所は精霊界ってところだろう。アニメで見た風景よりもちよ〜っと違うけれど、BMたちが居るんだから間違いない。

そして、遊戯王が盛んな世界。アニメの世界みたいなデュエルモンスターズが絶対の世界もあるんだし、地球は盛んじゃない方なんだろう。

そして、何よりも……BMは言った。世界を救って欲しい、と。

原因が分からないのに世界を救って欲しい……ってことは、多分遊戯王が盛んな世界に俺を行かせて、原因を探らせようという魂胆だろう。

「……なんで俺なんだよ？」

『私たちが選んだんだよお。マスターなら世界を救ってくれる、って！』

「……買い被りすぎだろ……ん？　なあ、つーことは慧たちも……？」

『彼らも世界を救ってくださる勇者に選ばれたのです。尤も、選んだのは私たちではございませんが』

ってことは、あいつらもこの世界のどこかに……。

俺は一度、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせて、腕を組む。

「……最後に確認。本当に……ほんとくに、夢とかじゃ無いんだよな？」

『うん、夢じゃないよ？』

「……………はあ〜」

おーけー、夢じゃない。信じよう。BMGが折角笑顔を向けてくれたんだから信じない、なんつー選択肢は無い。

ただ……………信じる代わりに一言言わせてくれ。

「……………現実逃避して良い？」

『駄目です』

即答だった。

アニメで相棒や王様、勿論霸王とかが居た世界とはまた違う世界。俺は《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》……………もとい、マハードとマナの導きによってこの見知らぬ世界に降り立った。

観衆の元じゃなくて良かった……………なんて安堵の息を零す。

あ、そうそう。

BMやBMGの名前はアニメで出たマハードやマナだけど、王様
が使用してた存在とは違うんだってさ。俺はそれよりも、王様達が
別の世界で実在していた事が驚きなんだけど。

それはともかく、マハードとマナは真正正銘、俺が初めてのマス
ターらしい。

人の居ない路地裏を抜け、俺は日の光を浴びた。空には雲一つ無
く、地球と変わらぬ広い青空が世界を包んでいた。

ひゅー、と駆け抜ける風は髪を撫で、柔らかく揺れる。

「そついや、慧たちもこの世界に来てるのか？」

『うん、居るよ。一番早い基さんなんて、半年も前から来てるし』

「は、半年!？」

なんでそんなに時間が空いてんだ……？

『この世界と精霊界は、時間の流れ方が違うのです。幸仁殿は4ヶ
月前、慧殿は2ヶ月前に来ています』

……そうなのか。

はあ……しつかし、やっぱり夢じゃなかったんだな……。

改めて、俺は辺りを見渡す。

この世界はアニメの世界と同じく、デュエルモンスターズが中心
の世界だ。道行く人の全員が様々な色のデュエルディスクを手に付
けているし、そこらにある店舗の半分以上がカードショップだ。

……カードショップだらけって……競争が激しそうだなあ。

「さて……これからどうすつか………」

当たり前だけど、俺は金が無い。いや、元々金欠気味ではあったんだけど……文字通り一銭も無い今よりはマシだった。

このままじゃ、世界を救うなんつー大業を成す前にのたれ死ぬぞ。

「きゃっ………！」

「ん………？」

女性の声………？

きよろきよろと視線を巡らす。すると、視界の端に路地裏へ連れ込まれていく女性の姿が見えた。周りの人たちは見て見ぬフリをしている。

「……………」

連れ込まれた………？

助けに行かなきゃ、という気持ちと怖い、という心が交差する。

俺は暫くその場に立ち尽くし、唇を噛んで顔を背けた。

『助けなくて良いの、マスター？』

隣にふわふわ浮いているマナ。

そりゃ、助けたいさ………けど、“昔”とは違うんだ。“昔”みたいに無鉄砲じゃないって自覚しているし、子供でもない。助けたところで、俺に利なんて無い。

そつだよ………普通なんだ。自分の事だけ考えてれば良い。

こんな身体になっちゃって……。

「俺は………」

燈夜に愛される資格、無くなっちゃった。

「……………」

バイバイ。

「……………チイツ！」

何、迷ってたんだ……俺。後の事なんて考えるなよ……俺らしくねえぞっ！？

一気に路地裏へと脚を動かした。恐怖で奮え、止まってしまううになる度に心中で喝を入れ、走りながら大きく深呼吸した。

路地裏では、3人の男が居た。金髪に赤髪、それと茶髪野郎。少し離れた場所に4つのデュエルディスクが転がっている。

1つはピンク色だし、女性のやつだろうか。

アニメで見たデュエルアカデミアの制服みたいな服装は破り千切られ、スカートも切られている。純白の下着がモロ見えだ。

プチン、と。

何かの糸が切れる音がした。

「よお……楽しいことしてんじゃねエの？」

基みみたいな口調になる。イライラとする心を落ち着かせるつもりなど毛頭無く、俺は感情のまま身体を動かす。

「なっ、なんだお前……!?!」

「んなもんでも良いだろーが。それより、随分と上玉見つけたな、てめえら」

「は、なんだよ……お前、混ぜて欲しいのか？ 最後なら別に良いぜ?」

茶髪がそう言うと、身体と口を押さえられている女性の顔がさらに絶望の色へと染まっていく。

「なら、俺も混ぜてもらっかな……」

近付く。片手で女性を触ろうと、俺は手を。

金髪の頬をぶん殴る為に振りかぶる。

「がはっ!?!」

「て、てめ……がっ!」

「ぐふっ……!?!」

金髪を殴り飛ばし、赤髪の腹を蹴り、茶髪の鼻っ柱をグーで殴る。ざまあ見ろ。

俺は上着を脱ぎ、女性に掛けてやる。きょとんとした表情の女性は少し可愛らしいけれど、今はそんな事を考えている暇は無い。

「大丈夫?」

「は、はい……」

「そう、良かった。立てる?」

コク、と頷くのを見た俺は身体を支えながら立たせてあげる。そ

してデュエルディスクのあるところまで歩いた。
ピンク色のディスクを持って、女性に差し出す。

「これ、君の？」

「そ、そうです……」

それを持って、路地裏から脱出しようと歩を進める。

「ま、待てよ……」

「あ、あ？」

やべ、スゲエ殺気立った声出た。

茶髪は見事に気絶しているが、金髪と赤髪はよろよろと立ち上がっていた。特に金髪はデュエルディスクを左腕に取り付けていて、展開させていた。

「おい、デュエルしろよ」

……その台詞、まさか現実で聞けるとは思わなかった……。しかもアニメだと、主人公が言う言葉だしな……。

つか、アレか？ デュエルで自分たちが勝ったら女を置いてけとか、そんな感じ？ そんなんぜってーヤダね。

とは言え……。

(ここ、遊戯王が主な世界なんだよなあ……仕方ない)

「ごめん、俺、デュエルディスク持ってないんだよね……借りて良い？」

「あの……私がデュエルします。元はと言えば、私が」

「大丈夫だよ。俺は君を助けに来たんだし、最後までケリ付けない

と」

ピンク色のデュエルディスクを左腕に取り付けて（初めてだから少し手間が掛かったのは秘密）、多重スリーブに入ってるデッキを装着する。

……良く入ったな………それにしても、俺がいつも使うメインデッキだけケースに入れてベルトに取り付けといて良かった。

俺がこの世界に持って来た物といえば、このデッキだけだしな……携帯や財布はバッグの中だけど、そのバッグは多分日本に置いたままだし。

デッキがディスクによって勝手にシャッフルされる。LPが4000と表示され、その下にあるランプが光った。

……4000？ マジで？ 無いわー。

………それにしても。

(………何、このランプ？ 充電切れ？)

「チツ、先攻はお前かよ………」

「仕方ないじゃんか。あっちのターンランプが光ったんだからよ。ま、後攻だから攻撃出来るし、良いんじゃない？」

………「ご説明どうも。

んじゃま、

「デュエルっ！ って言えよっ！！」

………あ、すみません。

「……現実逃避して良い？」（後書き）

マナの性格があやふやだ……っ！

そして、コメディって難しいツス。

誰かおせーて（泣）

感想、評価等お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1158y/>

遊戯王 LEGENDs ~ 伝説の名の元に ~

2011年11月2日15時24分発行